

角膜再生 細胞シート移植

目の角膜に重い障害を負った難治性の病気に対して細胞シートを移植する再生医療が承認されたと、京都府立医科大などが4日発表した。治療法がなく視力の失われるケースもあった障害に対する新たな治療法として、期待できるといふ。

細胞シートの販売名は「サクラシー」で、1月20日に再生医療等製品として厚労省の承認を取得した。患者自身の口の中の粘膜細胞を採取し、健康な妊婦から提供を受けた羊膜の上でシート状に培養して作製する。対象は、外傷や病気で角膜表面がまぶたなどと癒着した「角膜上皮幹細胞疲弊症」の患者。

府立医大など開発

国内では年間100人程度を見込んでいる。販売は、青森県弘前市のベンチャー企業「ひろさき」が担う。移植する際は、手術で目の表面の病変部を取り除いてシートを貼る。癒着が改善し、視力の回復も期待できるといふ。

京都府立医大の外園千恵教授らのグループが約20年にわたって開発に取り組んできた。当初は、再生医療に関する法律が整っておらず、紆余曲折があったという。外園教授は「多くの関係者の協力を得てようやく承認に至った。広く患者さんに治療を提供できるようになればうれし」と語った。

(広瀬一隆)

口の粘膜から作製 開発20年「ようやく承認」